

# 保健授業における目標創出型授業の授業実践 ～生活習慣病の学習を通して～

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース

田口 哲也

## 実践報告書要旨

保健の学習内容は、生涯にわたって健康な生活を送るうえで、他の内容と比較しても重要な内容を含んでいる割合が多いと考える。しかし、学校教育で扱う時間は決して多くない。現在様々な点において、保健授業の改善が求められているが、保健授業は「雨降り保健」といった言葉のように軽視される傾向にある現状である。さらに、現状多くの保鐘授業が、知識伝達型授業であり、教師の一方的な解説によって行われている。そこで今回は、「教師が設定した学習目標に対し、対話活動を通して学習者一人ひとりなりの知識構築によって目標に到達させると同時に、新しい目標となる問いや疑問を生ませ、学びを広がり続けさせる」目標創出型授業の授業実践を行った。

目標創出型授業は様々な型があるが、その中でも今回は「知識構成型ジグソー法」を用い、授業実践を行った。知識構成型ジグソー法は、初めに自分の考えを記入し、エキスパート活動、ジグソー活動、クロストーク活動を経て、最後にもう一度課題に対する自分の考えを記入する。

結果と分析では、まず、アンケートの結果よりいくつかの項目において有意差が見られた。「もっと知りたいと思うことがあった」「今日の学習に興味を持ち、関係することについて調べてみようと思った」という2項目に関しては、目標創出型授業のキーワードに直結するものであり、目標創出型授業が達成できたと考えられる。

1回目と2回目の授業の初めの回答、終わりの回答の比較を、ループリック評価表を用い、検証した。結果は、1回目2回目共にプラスとなった生徒は半数近くいた。さらに、最大値である4を獲得した生徒は1回目で29%、2回目で25%いた。これらの生徒は対話的な学習を通し、深い学びを行った結果、十分な回答を得ることができたと考えられる。さらに、点数が+2となった生徒の回答を見ると、初めの回答をさらに具体化した場合と、初めの回答が十分でなかったため、対話活動を通し、全く違うものに変わっていた生徒もいた。

また、1か月後に行った小テストでは、ほとんどの生徒が点数は同じか下がっていた。具体性に欠けるものが多かったが、終わりの回答と比べ少し記述が足りない、もしくはほぼ同じであった生徒が半数近く存在し、部分的には記憶している可能性があるかと推測できる。これに関しては、知識構成型ジグソー法を行った授業数が少なく、継続的に取り組んでいれば結果が変わっていたのではないかと考える。この点において本研究の限界と言える。

しかし、中には授業後に具体的な記述ができている生徒や、他者の意見を取り入れて記述している生徒もあり、この授業の可能性も見えた。

今後は、より多くの授業時数を確保し、別の視点からの分析や評価を含め、更なる授業改善を行うことで、生徒の学力を保障することが期待できる。